



▲子どもたちの植樹



▲早明浦ダム

背景

平成6年(1994)は異常な^{かつすい}渇水の年でした。^{りょうなん}綾南町では、水不足の危機的な状況の中で、無形文化財としてではなく、真剣に雨の到来を祈念して滝宮天満宮で念仏踊りの^{ほうのう}奉納が行われるほどでした。また、町民は、町の呼びかけに応じて連帯して懸命に節水に努力しました。大渇水をしのぐことができた要因の一つとして、綾南町では、こうした町民の努力の他に、先人が築いたダムと用水路による「命の水」があったことを伝えています。

アクセス 香川用水記念公園

- 国道32号道の駅「たからだの里さいた」より西南西へ直線距離約3km
- 三豊市財田町財田中2355
- 緯度経度 北緯34度06分01秒, 東経133度45分51秒



平成六年(一九九四)は歴史的な渇水の年でした。
 七月二日の梅雨明け以降、^{りょうなん}綾南町(現在の綾川町)の町民は、^{もうれつ}猛烈な暑さと異常な渇水のため^{しやうそうかん}焦燥感を感じていました。七月二四日に^{さめうら}早明浦ダムの貯水率はゼロとなり、別枠の発電用の用水に頼ることになりました。二日後に台風七号の接近により^{じゆう}慈雨がもたらされ、貯水率は三一パーセントにまで回復しましたが、その後再び貯水率は低下し、危機的な状況となりました。この危機を救ったのが八月一六日の台風一四号と九月三〇日の台風二六号でした。
 この歴史的な大渇水乗り越えることができた要因の一つは、香川用水が命の水を送り続けてくれたことです。渇水に心をいためた期間、住民は、毎日テレビに映し出される早明浦ダムの風景を食い入るように見つめていました。あのダムに残された水だけが、香川県の、そして綾南町の住民の命を支えてくれていたからです。台風によって早明浦ダムに勢いよく流れ込む水を見て^{かんせい}歓声を上げるような気持ちとともに、今更ながら、先人の果たした偉業に^{きょうたん}驚嘆する思いでした。「四国は一つ」の言葉を実感したものでした。
 この年以降、香川県の中学一年生は、遠足に香川用水関連施設を見学することが^{こうれい}恒例となり、早明浦ダム周辺に中学生の手で植樹を実施するような風景も見られるようになりました。